浄瑠璃寺九体阿弥陀中尊像の成立時期について

髙橋　知可

はじめに

京都府木津川市加茂町の浄瑠璃寺は、平安時代後期の浄土式庭園の伽藍配置をとどめる美しい寺である。国宝の九体阿弥陀像に始まり、四天王像、吉祥天像や、慶派の作と目される大日如来像、十二神将像など、彫刻史においても重要な仏像群が伝来している。なかでも九体阿弥陀像は、平安時代後期の浄土信仰の隆盛により、貴顕の御願などによって造立された九体阿弥陀像の唯一の遺構である。また、中尊像は像高一二一・〇cmの周丈六像であり、これに対して八体の脇仏は像高一三八・〇～一四三・三cmという中尊像より小さい像であることが特徴である。

浄瑠璃寺の歴史については、観応元年（一三五〇）に寺僧長算が浄瑠璃寺釈迦院伝来本を藍本として「流記上帖」と「年中行事下帖」の二帖に書写した『浄瑠璃寺流記事』（図1）が唯一の根本史料であるが、このうち「年中行事下帖」は現存しないことから、「流記上帖」を「浄瑠璃寺流記」と称している[1]。

「浄瑠璃寺流記」は、創建からおよそ三〇〇年後の写本という事情もあって、その内容は詳細を欠き曖昧であることが、従来の研究によって指摘されている[2]。特に創建年代の永承二年（一〇四七）から一〇〇年間の記述はわずかしかなく、伽藍の造営や安置仏についても明確に記されてはいないため不明な点が多い。また当時の浄瑠璃寺の事情については、他の文献史料からも窺えるところが少なく、それゆえに九体阿弥陀像の成立事情やその時期については諸説あり、未だ定まらないところである。

そこで本稿では、「浄瑠璃寺流記」に改めて着目して記事を詳細に検討し、創建年から順に寺歴を整理した上で、同書に記された法会次第や伽藍の様子、登場人物に手がかりを得ながら、九体阿弥陀像の中心的存在である中尊像（図2）に焦点をあて、その成立時期と背景の考察を行なっていきたい。

第一章　「浄瑠璃寺流記」と研究史〈一〉　永承二年から嘉承三年まで

「浄瑠璃寺流記」（以下「流記」とする）の内容を創建年から、伽藍造営に関する記事、法会、登場人物に注目し、加えて、九体阿弥陀像の成立に関する従来の研究についても併せて検討していきたい。なお、寺歴に関する各項目は（表1）を参照されたい。

まず以下では、本堂の創建を記した永承二年（一〇四七）から、新本堂の建立が窺える嘉承三年（一一〇八）までの記事を見ていく。

一、当山建立年記事

先本堂。永承二年丁亥七月十八日造立之云々。一日ニ葺之。

本願義明上人当麻所生云々。壇那阿知山太夫重頼。東小田原ハ長和二年癸丑建立云々。本願頼善。然東西両山前後三十五年相違也云々。

（傍線筆者、以下同）

すなわち、永承二年（一〇四七）が浄瑠璃寺の創建であり、「一日ニ葺之」という記述から、建立された本堂は小規模なもののようである。本願の義明上人、壇那の阿知山大夫重頼は他の史料に見えず共に来歴不明の人物とされている。続いて、東小田原寺が先立つ長和二年（一〇一三）に創建され、その三十五年後に西小田原寺として浄瑠璃寺が建立されたとある。この条からは、東小田原寺と浄瑠璃寺とが兄弟寺のような深い関係性を得て本堂が建立されたことが窺われる。東小、西小という名称は現在も地名として残り、東小田原寺跡は浄瑠璃寺から八〇〇m、徒歩で十分ほどの至近距離である。東小田原寺は随願寺という寺院であったことが建保二年（一二一四）の文書「譲与　私領田畠事」に見られる[3]。

この浄瑠璃寺の創建については、まず一九四三年、金森遵氏はここに記された本堂は独尊堂であるとし、後述する嘉承二年（一一〇七）に九体堂として移建されたとする説を唱えた[4]。つまり創建当初より現在の中尊像が本尊であったと主張する。

次に一九六三年、井上正氏は九体阿弥陀像の彫刻様式に着目し、とりわけ中

尊像及び三号像の肉身部分の張りに注目し、これを天喜元年（一〇五三）に制作された平等院鳳凰堂像の完成へ至る段階として、中尊像は鳳凰堂像に先立つ作例とし、さらに脇仏四号像は長勢作で、浄瑠璃寺九体阿弥陀像を定朝一門による造像とし、創建時点から九体阿弥陀像が成立していたという[5]。

こうした従来説のうち、金森氏が説くように創建当初の本尊が中尊像であったとするならば、周丈六の中尊像を安置する堂宇としては「一日ニ葺之」は些か小規模であるように思え、また、井上氏が唱える九体阿弥陀像を安置する堂宇も考え難い。さらに、井上氏の中尊像の成立年代が鳳凰堂像に先行するという主張は、定朝による鳳凰堂像以前の現存作例が不確定なため、検討の余地が残されている。「流記」に記された東小田原寺との関係に鑑みれば、東小田原寺の脇寺のような存在であったことも考えられ、本堂の創建と本尊の特定については更なる検討が必要である。

次に、創建から六十年後の嘉承二年、三年の記事が続く。

一、嘉承二年丁亥。一廻之後正月十一日丙戌奉移于本仏等西堂了。薬師如来

一、戒順坊阿闍梨日記云。嘉承二季丁亥正月十一日丙戌本堂壊始テ本仏等奉移渡于西堂。同月十六日地引始ム。同年七月十九日造功了。上棟云々。

同三年戊子二月十一日壬寅開眼供養、同六月三日壬午毘沙門供養。同月廿三日総供養密供養也。阿闍梨東山迎接房。讃衆三十人。願主公深阿波公。

嘉承二年（一一〇七）、本堂改修のために本仏等を西堂に移し、嘉承三年（一一〇八）二月に開眼供養、同年六月に毘沙門供養、その十日後に総供養（密供養）が、東山（東小田原寺）の阿闍梨迎接房を導師とし讃衆三十人にてとり行われ、一連の願主は阿波公公深とある。

創建時の堂宇の記述とは異なり、地引から上棟まで約七ヶ月を要する大規模な伽藍工事であり、加えて総供養には東小田原の阿闍梨を招き、讃衆三十人を備えた様子から、これは浄瑠璃寺にとっての画期であることが推測される。

また、嘉承二年、西堂に移された本仏には薬師如来との傍注があり、先にみた永承二年創建当時の本尊は「浄瑠璃」という寺号からして薬師如来であり、現在三重塔に安置される薬師如来坐像がそれであろうと推測されている[6]。

従来の研究では、この嘉承三年の条をめぐって諸説が唱えられている。

一九七八年、伊藤延男氏は総供養導師を務めた迎接房（経源）を根拠とし、この時の本尊は九体阿弥陀像であり、九体阿弥陀堂も当初から現在の建築構造であったとする。後述する保元二年（一一五七）の記事については、寺の北側に建っていたと思われる九体阿弥陀堂を西岸に移したとしている[7]。同様に小林剛氏と福山敏男氏も建築的側面から嘉承三年の九体阿弥陀堂成立説を唱えている[8]。

一九九九年、礪波恵昭氏は浄土信仰に根ざした迎接房（経源）の教義によって、経源の影響による九体阿弥陀堂の荘厳説を唱え、臨終来迎を願って九体阿弥陀像が造立されたとした[9]。ただ、臨終行儀において九体阿弥陀である必然性については、根拠が弱いように思われる。

二〇一三年、深沢麻亜沙氏は九体阿弥陀像の印相の違いと、小田原の浄土信仰の環境から、貴顕の御願によるものだけではなく、衆生により九品往生の上品上生を願って九体阿弥陀像は一具として造像されたと結論づけている[10]。浄瑠璃寺を取り巻く浄土信仰の環境から衆生御願とする結論は説得力があるが、衆生による勧進で九体もの造像が可能かという経済的な問題が残されているように思われる。

さらに二〇一四年、佐藤有希子氏は、嘉承三年供養の毘沙門天について、浄土信仰と毘沙門天信仰の関連性、及び堀河天皇崩御の追善仏事の隆盛による、中尊像と毘沙門天像の同時制作意図を唱えている[11]。毘沙門供養、総供養と続く日程からも毘沙門天と本尊の安置はほぼ明らかであり、その本尊が中尊像であるという考察は明快である。しかし、堀河天皇の追善仏事が浄瑠璃寺にまで影響を及ぼす背景については些か根拠が見出しにくい。

先に見た嘉承二、三年記事は、極めて詳細な記録であり、戒順坊阿闍梨日記という別史料を添えていることからも、それが寺歴の重要な年次であることは疑いなく、右の従来説では嘉承三年の九体阿弥陀像の成立が主流であった。

しかし一方で、嘉承二年条「奉移于本仏等西堂了。」の「西堂」に着目し、この「西堂」を、西方浄土との関連から阿弥陀堂であろうと解釈し、嘉承二年以前に阿弥陀像、すなわち中尊像が独尊として先行して存在していたとみる説が

近年唱えられている。

一九八七年に肥田路美氏は、中尊像の成立時期は明確にしていないが、この「西堂」と中尊像の平等院像との近似を根拠に、嘉承三年一具説に異論ありとして、これより早い時期の成立を示している[12]。

続いて二〇一五年に淺湫毅氏は、肥田氏と同じく「西堂」の存在と、定朝様の様式論から中尊像と脇仏の成立の年代差を認めた上で、中尊像については十一世紀末制作とされる日野法界寺像に先立ち、天喜元年（一〇五三）制作の平等院鳳凰堂像よりは下る一〇七〇年代頃との見解を示した[13]。また、制作仏師に関しては、中尊像の作風は定朝と覚助及び長勢らの定朝第二世代までのそれとは異なるとし、一〇七〇年代頃の当該仏師の消去法から南都仏師の祖、定朝第三世代である頼助を有力視する。頼助については明確な現存作例がなく比定が難しい。また一〇七〇年代の制作ならば頼助は十六～二十六歳に相当し[14]、周丈六本尊の大仏師としてはやや若年に思われるものの、様式論に基づく論の展開は誠に納得できるものである。

肥田氏、浅湫氏が唱える、「流記」嘉承二年「奉移于本仏等西堂了」を、西堂＝阿弥陀堂とし、その阿弥陀像＝現中尊像とする解釈は明快であり、中尊像が嘉承二年以前に成立していたとする主張は説得力がある。しかしながら、いくつかの問題も残されている。

当該条の「本仏」の傍注には「薬師如来」と書き込みがある。本尊が薬師如来であるならば、新本堂の改築に際して、何故に西堂に安置されていた阿弥陀像を本尊に変更したのかという疑問が残る。また、西堂が浄瑠璃寺内の堂宇ならば、嘉承二年以前の浄瑠璃寺は、本堂には等身薬師如来像が安置され、西堂に周丈六の現中尊像が安置されていたということになり、些かアンバランスな印象を受ける。「薬師如来」と書かれた傍注の信憑性も含めて当該条の解釈には再検討が必要であろう。

ここまで、創建から新本堂建立の嘉承三年までを検討してきた。嘉承三年の新本堂に安置された仏像については、西堂本尊の蓋然性が高い中尊像、九体阿弥陀像、創建本尊といわれる薬師如来像、六月供養の毘沙門天像が示唆され、総供養の論点となるのだが、やはり判然とはしない。

ところで、「流記」嘉承三年条の総供養には二人の人物が記されている。総供養導師を務めた迎接房経源と願主の阿波公公深である。浄瑠璃寺の画期ともなる重要行事の供養導師には供養仏に対する信仰の背景があり、願主には相応の経済力や影響力が考えられる。この二人の来歴の考察から新本堂の供養仏を窺い知ることができるのではないかと考え、後章にて私見を述べたいと思う。

第二章　「浄瑠璃寺流記」と研究史〈二〉　保延五年から平治元年まで

次に、嘉承三年条に続く保延五年（一一三九）条から、弥勒三尊像を安置した十万堂が建立された平治元年（一一五九）条までの記事を見ていく[15]。

一、保延五年己未四月十四日。夏中理趣三昧始行之。延観上人勧進也。
一、永治二年壬戌正月十五日。浄土院阿弥陀講始行之。常教房勧進也。

保延五年、延観上人の勧進により夏中に理趣三昧の行を始むるとある。延観上人とは浄瑠璃寺岩本常光院の住侶と見られ、「流記」久安六年条に来歴が記されている。

永治二年（一一四二）、常教房の勧進により浄土院にて阿弥陀講の行を始めたとある。阿弥陀講とは阿弥陀の功徳を讃えて来迎を願うものであり往生講、迎講ともいわれることから、浄土院の本尊は迎接阿弥陀像であったと考えられる。この点については後述する。続いて久安二年（一一四六）条が記される。

一、久安二年丙寅。五間四面の食堂并三間一面釜屋造営之。大工末包。同歳四月一日大般若経一部六百巻書写供養。施主僧行遍。本堂安置之。供養導師現観房東小田原。

久安二年、食堂や釜屋の造営が行われたと同時に、行遍を施主として大般若経六百巻を書写供養し本堂に安置したとある。

先にみた嘉承三年に建立された本堂は、これによると六百巻もの大般若経を安置できる規模であったことが窺える。加えて、嘉承三年から数十年を経た浄瑠璃寺は、子院や僧坊が建ち並び住僧も増え、寺勢活況を呈していた。施主僧行遍は当寺住侶と見られるが、供養導師は東小田原現観房とあり、ここでは東

西小田原両寺の深い関係性が継続されていることも見てとれる。

一、保元二年丁丑正月十六日。本堂於西岸之辺ニ壊渡之了。五十年之後承元元年丁卯本堂之葺。（下略）。

一、戒順坊阿闍梨日記云。（中略）。而保元二年丁丑正月十六日本堂於西岸辺ニ壊渡之云々。五十二年之後承元々年本堂葺之云々。年記聊不審也。可尋之者也。

一、久安六年庚丑九月之比。伊豆僧正御房（恵信一乗院法性寺殿御息忠通公）当山延観上人草庵岩本常光院仁御隠遁之時。始テ一乗院御祈所ニ成了。又為彼勧進。同年十月十四日三日三ヶ日夜不断大念仏始行之。大僧供等多年御経営在之。其後念仏相続而于今無闕怠矣。凡当山開山之昔ハ坊舎毛散在シ。仏閣毛不連宇。而ニ僧正御房御座之時。重有結界御沙汰。被掘池被立石。種々有御興行云々。（下略）。

保元二年（一一五七）に本堂を池の西岸に移築したことを示す記事である。

さらにこれに先立つ久安六年（一一五〇）、浄瑠璃寺岩本常光院に隠遁していた興福寺一乗院恵信（忠通息）の勧進により、浄瑠璃寺は一乗院の御祈所となり、恵信の指示によって苑池、伽藍の整備造成が行われ、その功績が讃えられている。この恵信と興福寺との関係および苑池伽藍整備については、嘉承二、三年記事と同様に、戒順坊阿闍梨の日記も引用され詳細な記述であることから、寺歴にとって最重要な出来事であったことが窺われる。

恵信は摂政藤原忠通の息であり、法眼、別当職を務めた有力者である[16]。興福寺内紛により一時期浄瑠璃寺に隠遁となったが、後に復権している。久安六年から保元二年の仔細はこの間の記録である。

従来の研究では、杉山信三氏[17]、関根俊一氏が[18]、恵信僧都の経済的支援なくしては九体阿弥陀堂の建立、苑池整備事業はあり得ないといしている。

第一章で述べた独尊像としての中尊像成立を唱える従来説も、苑池整備、本堂移築、恵信の経済力を根拠として、保元二年に九体阿弥陀像として整えられたものと概ね一致している。

さらに、平成二五年（二〇一三）の宝池遺構調査によって[19]、十二世紀半ば頃に池の護岸整備が行われ、九体阿弥陀堂が移築（建立）されたことが概ね立証されており、「流記」との合致も認められることから、九体阿弥陀像の成立は保元二年でほぼ確定的と言えるであろう。

しかしながら、やや違和感を覚えるのは、恵信の出自と興福寺との関係を踏まえると、現本堂の九体阿弥陀堂は些か規模が控えめな印象を受ける。当時恵信が興福寺内の勢力争いで寺を追われて浄瑠璃寺に隠遁していたことが影響しているのであろうか。ともあれ、「流記」の「本堂於西岸辺ニ壊渡之云々。」を率直に理解すれば、境内いずれかに建っていた九体阿弥陀堂を壊して池の西岸に移したとなるが、保元二年以前に境内伽藍として確認される浄土院や岩本常光院、大般若経を安置した本堂については、九体阿弥陀堂であったとは断定できず、問題が残される。

一、平治元年己卯十一月十八日。十万堂棟上。彼堂者之勢覚上人勧進十万人。々別一升宛米。造立一間四面御堂。同奉造立安置弥勒三尊。書写瑜伽論一部。八名経一万巻矣（中略）爰不遂素意而逝去給了。尤無念也。

此故云十万堂云々。（中略）同承安元年辛卯三間四面堂仁改成之。而名秘密荘厳院云々。今真言堂也。同二年壬辰十二月十日密供養。阿闍梨空心一印上人也。職衆十人東山中川等人々也。委細記寺庫在之云々。

続いて、平治元年（一一五九）に興福寺住侶で浄瑠璃寺に隠遁していた勢覚上人が十万人の勧進によって一間四面堂を建立し、弥勒三尊像を安置し供養を行う。十万堂と呼ばれたその堂宇は、承安元年（一一七一）に三間四面堂に改築、秘密荘厳院と名を改め、翌年空心一印上人を導師として東小田原、中川寺十人を識衆として密供養を行なった、という内容である。なお、この弥勒三尊像については「流記」における造像記事の初見である。

空心上人の来歴は不明だが、この三年後に上人の沙汰で九条兼実による額が打たれ、治承二年（一一七八）に北京からの三重塔移築の供養導師も務めていることから、京の摂関家との関係を持つ有力な人物と見られる。またここから

は幾人もの興福寺からの隠遁者がいた様子も窺われ、浄瑠璃寺は興福寺の別所となっていたようである。興福寺や有力者との関係性を強めた結果、寺勢は増し、東小田原寺とも対等な立場の大寺となったと考えられるのである。

以上、「浄瑠璃寺流記」を創建年から順に考察してきた。創建時の浄瑠璃寺は東小田原寺（随願寺）の脇寺のような簡易な本堂から始まったようであるが、嘉承二、三年（一一〇七～八）の新本堂建立と保元二年（一一五七）の苑池伽藍整備の二つの画期を経て、平安最末期には浄土庭園様式の境内に幾つもの伽藍が配され、南山城地域においても南都興福寺を後ろ盾とした有力な寺の一つとなったことが知られる。ただ一方で、従来説には未だ見解の相違が認められ、幾つかの問題点が残されている。

九体阿弥陀像の成立については、保元二年を下限とすることで大過ないと考えるが、立ち返って中尊像の成立を検討すると、周丈六の金色阿弥陀像の造像にはやはり相応の財力を持つパトロンが必要である。前述の深沢氏が唱える衆生の勧進による造像も否定はできないが、それとて有力な影響力を持つ人物に依らなければ容易くはないと考える。永治二年（一一四二）の阿弥陀講本尊が迎接像としての中尊像であるとするならば、それ以前の寺歴に中尊像造像の何らかの記述があって然るべきであろう。

中尊像の成立事情を明らかにするためには、関係人物の来歴にあたるべきであり、その手がかりとしては、やはり画期となる嘉承三年の大事業と考える。そこで次章では、総供養導師を務めた阿闍梨迎接房経源、願主である阿波公公深の二人に注目し検討を進めたい。

第三章　嘉承三年　総供養の関係人物中心に

嘉承三年（一一〇八）総供養の関係人物の考察に先立ち、平安時代に一軀の丈六坐像を制作するための経済条件をまず確認しておきたい。

清水善三氏の「平安末期における造仏の一例―「久寿二年、丈六阿弥陀仏像支度注文案」の場合―」によると[20]、丈六像一軀の制作は、およそ十人前後の仏師集団で造立期間一二五日の長期工期が必要であり、総費用として概算総額で三二三〇〇両掛ったとされる。法量、荘厳の差などがあるとはいえ周丈六阿弥陀像を新造させ得る願主とは相応の経済力と社会的背景を持ち得ていたはずということになる。

こうした経済条件を踏まえた上で、阿闍梨迎接房経源と、阿波公公深、この二人について来歴、背景をみていきたい。

（一）総供養導師　阿闍梨迎接房経源

「流記」嘉承二、三年条からは、創建より六十年を経て本堂を建て替えるにあたり、総供養が盛大に行われたことが窺われ、寺歴における最も重要な出来事であったことが知れる。経源については「東山迎接房」とあるように、浄瑠璃寺住侶ではなく東小田原寺（随願寺）の住侶であったことが知れ、総供養導師として他寺より招かれていることから、浄瑠璃寺と深い関係性を持つ人物であることが窺われる。

総供養次第については、新本堂落慶と、二月の開眼供養、および六月の毘沙門供養で安置されたであろう仏像等と考えられる。その供養の様子については、密供養、讃衆三十人という記述から、声明を伴った大規模な法会であったようである。

迎接房経源の事績については、前述の礪波氏の指摘にもあるように、保延五年（一一三九）頃に、三善為康撰により成立した『後拾遺往生伝』に見出すことができる[21]。

上人経源者中納言定頼卿之息也。壮年之時、出俗入眞。初則住興福寺、窺法相之義淵。後則遷小田原、汲真言之定水。念佛多年、行業幾日、偏修往生業、故號迎接房。（中略）
于時生年八十五、夏蝋七十七。（下略）

経源は、中納言藤原定頼の息で、興福寺義淵の元で法相を学び、後に小田原に居を移し、真言を学んだ。念仏や、行を繰り返す篤い浄土信仰者で、それゆえに迎接房と号されたという。八十五歳で卒し、出家後七十七年というから八歳頃の幼少期に興福寺に入ったのであろう。嘉承三年総供養時には既に七十歳の老僧であったことが知れる。同書には、小田原に移った後に真言を修めたとあるが、管見によれば享保九年（一七二四）に写された『真言宗血脈』に経源

の名が見られ[22]、同じく江戸中期の『西院流血脈』にも経源は「迎接房」との傍注が付記されている[23]。

さらに、『後拾遺往生伝』には臨終の様子が以下のように記されている。

保安四年窮冬九日巳復尋常、忽以沐浴、即脱奮服、更著新衣、威儀無闕、正念不乱。至同十日、弥陀佛手繋五色縷引之、念仏合殺或十或百。（中略）此間出坐禅、置手縷、暫以安息、聊以飲食、其後勤僧衆令行殲法、七箇日結願漸及辰刻、門弟来集念佛合殺。上人謂曰、吾生涯之間、如法経三部所奉書写也。其時紙袈裟取出可令著者、門弟従之、便止弥陀之合殺、唱観音之合殺。是時手結定印、身亦端坐、如入禅定、乍居気絶。

保安四年（一一二三）の冬、沐浴を行い、真新しい衣に着替え、威儀を正し心を整え十日、阿弥陀仏の手から五色の縷を引き、念仏合殺を十、百行う。この間座禅の手には阿弥陀仏から引いた縷が握られていた。その後門弟が集まると、上人は如法経を生涯に三部書写したと言い紙袈裟を着け、門弟たちと共に阿弥陀合殺を止め観音合殺を唱え、定印に結び端坐し禅定に入ったかのような姿勢で死を迎えたとある。臨終に際して阿弥陀の御手から五色の縷を引いて引接をし、禅定にて入滅とあり、その様子は迎接房の名に相応しい阿弥陀来迎を願う人物といえる。

阿弥陀の手からの引接次第については、法成寺無量寿院で臨終を迎えた藤原道長の記述があり、『栄花物語』には「九体の阿弥陀の前の念誦の座に床を延べ、蓮の糸を以て村濃の組み紐を作り、九体の仏の御手を返し中台に集めた結縁の糸を握る」と記される[24]。道長臨終の様子からは、九体阿弥陀像全ての手に結縁の糸が結ばれ、それを中台（尊）に集めて引いた格別の次第が記される。

一方、『後拾遺往生伝』にはそのような特筆される記述は見られない。これを踏まえると、臨終引接した阿弥陀像は九体ではなく、独尊像とみるのが妥当なように思われる。経源は、浄瑠璃寺と関係深い東小田原寺（随願寺）から出仕して総供養導師を務めるほどである。臨終引接した阿弥陀仏が浄瑠璃寺像であったのならば、臨終を迎えた保安四年の段階では九体阿弥陀像は成立していなかった可能性が考えられる。

とはいえ、経源が臨終を迎えた寺は『後拾遺往生伝』に記されていない。東小田原寺（随願寺）、または本尊阿弥陀像を移坐した縁起が残る円成寺の可能性もあろう[25]。しかしながら、嘉承三年の浄瑠璃寺新本堂建立の総供養に浄瑠璃寺の住侶があたらず、東小田原寺の経源が導師を務めるに至った理由は、篤い浄土信仰、迎接を望むその思想に相応しい来迎印の阿弥陀像が安置されていたはずであり、すなわちそれこそが中尊像であったのではなかろうか。

経源は、『尊卑文脈』には「隠遁」と記されるのみだが[26]、関白太政大臣藤原頼忠を曽祖父に、和漢朗詠集などの撰者であり、有職故実に優れ、北家小野宮家嫡流である正二位別当権大納言藤原公任を祖父に持ち、正二位権中納言藤原定頼の息という貴種である。また『円成寺縁起』には本尊の阿弥陀仏を荒廃した道長建立の法成寺から移坐して安置したとある[27]。経源にはこうした社会的基盤による経済力と摂関家との結びつきがあり、南山城一体から南都にかけて大きな影響力を持っていたことが史料からも窺える人物である。その実力は浄瑠璃寺の発展においてのキーマンであったことは疑いないであろう。

（二）願主　阿波公公深

「流記」の嘉承三年（一一〇八）条に願主として表れるのが、阿波公公深という人物である。

この阿波公公深については従来の研究では来歴不明とされている。しかしながら、大規模な新本堂建立、それに伴う総供養には、経源のみならず願主の経済力が多大に反映されていたはずであり、人物の比定が九体阿弥陀像または中尊像の造像背景の鍵となることは明らかである。「公深」は、『尊卑分脈』や「僧歴」「血脈」の類からも見いだせず、また「阿波公」の手がかりも薄い。

唯一、古文書史料に注目すべきものがある。『平安遺文』に収録された「大和國東大寺花厳会床饗免田注文案　保延三年三月条」である[28]。

花厳會床饗免田注文

合

内平群郷東條一里（中略）

□(花)厳會床饗免田名々事

合貳拾町
稲田庄九町八段　櫟田六段小阿波君公深領
南土田庄三丁八段半河内権守清貞領、但見勤十七前半、對捍廿一前、勢辨三段
春禅二段　武重一丁三段半一乗院御領　國重一丁大　兼秀二段大
知事實圓一丁二段　為助名三段号吉田御庄威不動　北土田庄一丁小覚仁見領
巳上
右廿町免田名々注進如件
保延三年三月　日

文中割書に「阿波君公深領」という記述が認められる。

阿波君公深と阿波公公深は一字違いであり、「君」と「公」は双方「きみ」と訓読できることからも同一人物ではないかと考えられる。保延三年（一一三七）は嘉承三年（一一〇八）から約三十年後となるが、人物の存命に問題の無い範囲と考え、この文書を阿波公公深の有力な手掛かりとして検討を行いたい。

この文書は、保延三年の、東大寺華厳会での饗膳勤仕料に関しての免田注文案で、東大寺威儀師覚仁により作成されたと思われる[29]。

前段（中略箇所）には東大寺領である土田庄について免田の詳細が記載されており、後段に「～稲田庄九町八段　櫟田六段小阿波君公深領」とあり、阿波君公深は櫟田庄の領主であることが分かる。この櫟田庄は延久三年（一〇七一）九月の「興福寺大和國雑役免坪付帳」の文書内に興福寺領として表れており[30]、応永十三年（一四〇六）までは興福寺領として持続されていたことが文献により明らかである[31]。稲田庄についても興福寺領であり、阿波君公深については興福寺に関連する人物であることが見てとれる。

続く南土田庄については東大寺領であることが知られるが、武重という庄については「一乗院御領」とあり、興福寺一乗院のことであろう。また「知事實圓一丁二段」と記されるこの實圓という人物については、寿永二年（一一八三）「興福寺食堂造営段米未進注文」に見える興福寺僧知事の伊賀公實円だと思われる[32]。

以上の考察から、この文書は東大寺華厳会に関するものではあるが、後段の部分については興福寺及び興福寺の僧が領主である免田庄園についての記載となっている。阿波君公深については興福寺領の櫟田庄領主であることから、興福寺関係の僧と推察される。阿波君と呼ばれる理由については、阿波国出身者であるか、所領を持つ人物というところであるが、管見の限りでは阿波国の史料に当該人物の名は見えない。

一方、阿波という地名に注目すると、大和國平群郡夜摩郷阿波という地名があり、現在は奈良県生駒郡斑鳩町阿波付近となる。古代に飽波（あくなみ）であったものが変じて阿波となったとも、阿波国の人々が移り住んだからであるともいわれる地名とされる[33]。阿波君公深領である添上郡櫟田庄は、現在の奈良県大和郡山市櫟枝町付近であり、この大和の阿波からはおよそ八kmという近距離に位置することが知れる。こうした地理的要素に鑑みれば「阿波公」は大和の阿波を意味する可能性もある（図3）。

阿波公公深については、これ以外の史料にはその名を見出すことが出来ず、人物の特定に至ることは困難であるが、興福寺の僧であり、南都南西にあたる大和郡山付近に所領を持つ人物だと考えられるのである。

阿波君公深所領の櫟田庄は興福寺から凡そ八・五km、興福寺から浄瑠璃寺も凡そ八kmと地理的にも近く、互いに影響の及ぶ範囲ではないかと思われる。ただ、嘉承三年の新本堂建立に際して願主となった理由については、所領を持ち裕福であったという経済的理由の憶測程度しか答えを得られないが、同じ興福寺との関係が深い経源との接点が一つの大きな要因であったと考えられるのである。

以上、嘉承三年の総供養に関わる、総供養導師経源と願主阿波公公深について考察を重ねてきた。経源については、いくつかの史料にその名が残されていることから来歴や信仰背景について知ることができた。願主の阿波公公深については、一つの古記録にしかその名が見えず、興福寺僧であろうという推論に留まった。しかしながら、この嘉承三年総供養に二人の興福寺関係の僧が携わるということは、相応に浄瑠璃寺と興福寺との関係が見てとれる。従来の研究では浄瑠璃寺の発展は久安六年（一一五〇）の恵信が隠遁した折に結ばれた興福寺一乗院との末寺関係に由来して理解されてきたが、本章考察からは嘉承三年時点において、既に浄瑠璃寺は興福寺と強い関係にあった事が窺われるのである。

また、経源の迎接を望む信仰背景からは、総供養の安置仏として中尊像の可能性も見出された。しかしながら「流記」の検討では、嘉承三年の総供養に際して新造されたとみられる仏像は毘沙門天像のみである。しからば中尊像は嘉承三年以前のいつ成立したのかという問題が残される。そこで次章では、従来の研究で注目されてきた嘉承二年以前の存在が明らかな「西堂」とその本尊について検討しつつ、創建から嘉承二年までの「流記」に記されていない六十年間に着目し、中尊像の成立時期について考えていきたい。

第四章　創建から嘉承二年まで　六十年間の再検討

「流記」嘉承二年（一一〇七）条の冒頭には「一廻之後」と記され、創建の永承二年（一〇四七）条から一足飛びに六十年後の嘉承二年の新本堂着工の記事へと移る。「一廻」として新本堂の建立に臨んだと記された理由は、この間の藍本は散逸してしまったか、あるいは創建期は記録すべきことがあまりなかったのかも知れない。しかしながら、この空白の六十年の再検討にあたっては、従来の研究ではほとんど注目されていない二つの史料がある。一つは「流記」延久三年（一〇七一）条の記事、もう一つは、長治二年（一一〇五）銘記が残る浄瑠璃寺伝来の像内納入品である。

（一）「浄瑠璃寺流記」延久三年条

一、延久三年辛亥六月十四日、往生講始行之。土沙加持在之。

この条は「流記」文治四年（一一八八）条と建久五年（一一九四）条の間に挟まれて記載されている。しかし、延久三年は西暦一〇七一年にあたり、本来であれば創建記事の永承二年（一〇四七）と、新本堂建立記事の嘉承二年（一一〇七）の間に記載されるべきものである。延久三年の干支は辛亥であり、同年の記事と認めて良いであろう。

堀池春峰氏によるとこうした編年体が守られていない記述が「流記」には数箇所確認されており、それは書写された折の藍本が良本ではない状態であったために起きたとされている[34]。この条も同様の経緯によって、百年以上も下る時代に誤って書写、編集されたものと思われる。

当該の条は、延久三年に浄瑠璃寺で往生講の行が始められたという内容である。往生講では土沙加持も修したとある。

往生講とは、極楽往生を願って念仏や行を修す講であり、往生講次第の例としては寛和二年（九八六）に比叡山横川首楞厳院にて結成された二十五三昧会がその先駆けとして知られている。慶滋保胤が記した『二十五三昧会起請』「八箇条起請」（以下「起請」）にはその次第が以下のように記される[35][36]。

一、可毎月十五日勤修念佛三昧事。
一、可念佛結願、次誦光明真言、加持土砂事。
一、可調心護道擇入補闕事。
一、可建立別處號往生院、結衆病時令移住事。
一、可結衆病間結番瞻視事。
一、可點定結衆墓處號花墓廟、二季修念佛事。
一、可常念西方、深積功力事。
一、可結衆没後守義修善事。

これによれば、ひたすら極楽往生を願って、昼は法華経、夜は光明真言の念仏三昧、そして病を得て死に際した結衆には手厚いサポートを行うものであることが読み取れる。「流記」延久三年条の「往生講を始む」という記事を、この「起請」に照らし合わせると、「次誦光明真言、加持土砂事。」と付合し、篤い浄土信仰と、こうした意義を持つ往生講活動が浄瑠璃寺内において行われていたということが窺われる。

さらに注目すべきは「起請」の「可建立別處號往生院」である。別所に往生院を建立し、次第によれば「阿弥陀像を安置し」とある。すなわちこれは、延久三年の浄瑠璃寺にも、往生院と阿弥陀像が備えられたことが示され、往生院は西方極楽往生を願うという意義において「流記」に記された「西堂」がまさに符合する。また阿弥陀迎接を願う往生講には、来迎印を結ぶ中尊像の存在がなくてはならない。二章で述べた「流記」永治二年（一一四二）条の「浄土院における阿弥陀講の行を始む」に至る、浄瑠璃寺の浄土、往生信仰の継承と「往

生院」「西堂」「浄土院」という伽藍名からも、中尊像の存在は明らかであろう。

加えて、「起請」に表れる、「別處」について簡単に述べておきたい。そもそも「別(處)所」とは、深山などで修行に専念するための場所、堂宇を指すものであるが、井上光貞氏によると[37]、十一世紀半ばの南山城一帯には南都大寺の修行の場として別所が各所に設けられており、浄瑠璃寺と東小田原寺等がある小田原は興福寺別所で、光明山寺は東大寺別所であった。「流記」嘉承三年条の新本堂建立における経源や阿波公公深、岩本常光院に隠遁した延観や、その伝を頼り隠遁した恵信ら、「流記」に表れる多くの人物が興福寺縁であり、この小田原別所との関係に由来することが見てとれるのである。

浄瑠璃寺で往生講が修された延久三年当時の南山城には、元暦元年（一一八四）成立の『高野山往生伝』[38]、天永二年（一一一一）頃成立の『拾遺往生伝』[39]、にその来歴が表れる小田原聖と呼ばれた迎接房教懐が小田原（東小田原寺か）に住しており、熱心な浄土信仰の布教、勧進を行なっていた。また東大寺三論宗永観が光明山寺（旧山城町、現木津市）に隠棲していた時期とも符合し、永観が禅林寺に入ったのちの承暦三年（一〇七九）に往生講の作法書『往生講式』を記していることからも[40]、この時期の小田原、浄瑠璃寺を取り巻く浄土信仰の様相は、迎接を期待する往生講が隆盛であったことは十分に考えられる。

永観の『往生講式』にも別所である往生院には阿弥陀迎接像を安置する旨が記されており、それを踏まえるなら、浄瑠璃寺の延久三年の往生講の本尊が来迎印阿弥陀像、すなわち中尊像であったことが想定されるのである。ならば、その成立は延久三年（一〇七一）をやや遡る時期とする事が可能であろう。

（二）像内納入品　印仏、摺仏

次に、もう一つの注目される史料が、浄瑠璃寺伝来の像内納入品である「十二体印仏」（図4）と「百体摺仏」（図5）である。ともに和紙に定印を結ぶ阿弥陀仏の姿が並ぶ版画である。写経と同様に功徳を積む行為、作善として数多く制作されて像内に籠められ供養するものである。これが、いつどの阿弥陀像の胎内から取り出されたものかは不明とされているが、昭和の初めには像内より取り出されていたようである。坊間に流布し散逸してしまっているものであるが、像内納入されていた最古の印仏、摺仏ということである[41]。

「十二体印仏」は、十二体の阿弥陀仏を一組として紙に印を捺すようにして並べ制作した版画である。紙縒で綴じて束ねられた状態のものがあり、この紙縒に以下の銘記が残るものがある[42]。

四千五十躰　長治二年五月十五日
五十枚　別八十躰

長治二年（一一〇五）は、新本堂着工の嘉承二年（一一〇七）の二年前である。嘉承三年の総供養にいたる一連の行事に関するものということは概ね確かだといえよう。

一方の「百体摺仏」については、百体の定印阿弥陀の姿を板木に彫り、紙に摺り写された版画である。内田啓一氏によると「百体摺仏」の方が「十二体印仏」よりも像容が緩く、古様であるとしている[41][43]。「印仏」については、浄瑠璃寺伝来の吉祥天像もあり、十二世紀以降の作善として浄瑠璃寺に定着していたことが窺われる。

技術的な側面から検討すると、百体の仏像を彫り、紙に写す作業の「摺仏」よりも、十二体をユニット判として一枚の紙に何回か捺して多数作善を可能にする「印仏」の方が合理的手法であり、年代が下るというのは蓋然性が高いと思われる。内田氏による「百体摺仏」の方が古様という見解を入れるならば、「百体摺仏」の制作は長治二年を下限としてさらに遡ることになり、像内にそれを納入された阿弥陀像も嘉承二年、長治二年を遡って安置されていたことが窺われるのである。

このような版画による絵像の像内納入品が写経とは異なり、浄瑠璃寺においてどのような活動に用いられていたのかは定かではないが、ややプリミティブさが見られる愛らしい阿弥陀像の姿や、文字を用いない絵像という手法からは、貴顕の作善というより、衆生の願いを叶える勧進を伴う作善であったのではないかと思われ、浄瑠璃寺の創建から嘉承二年に至る六十年の寺勢を支えていた人々の姿を見る思いがするのである。

浄瑠璃寺創建からの六十年間の再検討にあたり、「流記」延久三年条の往生講記事と、像内納入品である「十二体印仏」「百体摺仏」について考察を行った。いずれの考察からも、嘉承三年総供養以前に、既に阿弥陀像が浄瑠璃寺には安置されていたと考えられ、その成立時期を示すならば、延久三年（一〇七一）

をやや遡る時期から長治二年（一一〇五）までとなろう。

この往生講の次第や像内納入品に見る多数作善の行いには篤い浄土信仰の様相が窺われ、当該の阿弥陀像については迎接像つまり来迎印阿弥陀像がふさわしいように思われる。慎重を期すべきであるが、その迎接像はやはり中尊像に比定し得るのではないかと考えるのである。

おわりに

浄瑠璃寺九体阿弥陀中尊像の成立時期を検討すべく、従来研究を踏まえつつ「浄瑠璃寺流記」について、創建年代から丁寧に検討を試みた。

従来の研究では注目されてこなかった「流記」延久三年（一〇七一）条の往生講と、阿弥陀像内納入物である印仏、摺仏の年代の検討により、中尊像の成立時期は延久三年をやや遡る可能性が得られた。さらにこの結論からは、嘉承二年（一一〇七）条に見える「西堂」の本尊が中尊像である可能性を強めることともなった。これは、奇しくも中尊像成立年代を彫刻様式論から一〇七〇年代とした淺湫毅氏の主張と並ぶこととなる。

加えて、嘉承三年（一一〇八）の総供養に関わる経源、阿波公公深の来歴の検討からは、興福寺との関係が寺歴の早期から強く結ばれていたことも窺われた。延久三年に中尊像が成立していたのならば、当時の興福寺小田原別所の信仰環境が、その成立に大いなる影響を及ぼしたと考えて良いであろう。

改めて「流記」を見渡してみると、嘉承三年以降、真言密教による法会や名称が多いことに気付かされる。四章で検討した延久三年条の往生講に伴う土砂加持は密教加持であり、嘉承三年の総供養にも密供養と注釈が付され、讃衆を伴う声明供養である。夏中理趣三昧行、八祖御影供などの法会に加え、秘密荘厳院等の堂宇名、醍醐寺や園城寺の僧名も見られる。

本稿では詳細には触れないが、小田原別所は真言密教系浄土信仰の拠点であったようであり、興福寺法相は真言との兼学であった。小田原を拠点とした教懐はのちに高野山に入山して高野聖の祖となり、総供養導師を務めた経源も真言宗の法脈に連なる。

従来の研究ではこうした真言密教系浄土信仰と中尊像の成立についての関連性は検討されてこなかった。しかしながら、中尊像の成立時期を一〇七〇年頃にまで遡らせるならば、避けては通れない事情であると考えている。加えて周丈六の来迎印阿弥陀像の造像を可能にするパトロンについても課題であり、浄瑠璃寺が抱える真言密教系浄土信仰と小田原別所の研究を深め、次稿に託したいと思う。

【註】

1　堀池春峰『大和古寺大観　第七巻　海住山寺・岩船寺・浄瑠璃寺』岩波書店、一九七八年、一〇九～一一一頁。

2　伊藤延男「浄瑠璃寺の歴史」『大和古寺大観　第七巻　海住山寺・岩船寺・浄瑠璃寺』岩波書店、一九七八年、六四～六五頁。

3　『鎌倉遺文　第四巻』東京堂出版、一九七三年。
二一〇五文書「譲与　私領田畠事　建保二年五月廿九日条」
～次畠所役、自往年東小田（原脱カ）随願寺所合升～（傍線筆者、以下同）

4　金森遵「浄瑠璃寺阿弥陀如来像の造立年代」『史迹と美術一五二号』、一九四三年。

5　井上正「浄瑠璃寺九体阿弥陀如来像の造立年代について」『國華』八六一号、一九六三年。

6　前掲注2　伊藤氏解説、六四頁。

7　前掲注2　伊藤氏解説、六三～六八頁。「浄瑠璃寺流記」に沿い、主に建築視点からの論。

8　小林剛『浄瑠璃寺』鹿鳴荘、一九五七年。嘉承説。建築史学的側面から本堂の形式をして導く。
福山敏男『浄瑠璃寺　日本の寺・5』美術出版社、一九五九年。

9　礪波恵昭「南都の浄土信仰と造像活動の一形態―迎接房経源と浄瑠璃寺九体阿弥陀像をめぐって―」『奈良学研究二号』帝塚山大学奈良学総合文化研究所編、一九九九年。

10　深沢麻亜沙「浄瑠璃寺九体阿弥陀像を中心とした平安時代後期の信仰と造像に関する研究」『鹿島財団年報』鹿島美術財団編、二〇一三年。造営に関しては貴顕のみでなく幅広い身分の人が関与したとしている。

11　佐藤有希子「京都・浄瑠璃寺四天王像に関する一考察―浄土思想との関係を視野に入れて―」『図像学２　イメージの成立と伝承』仏教美術論集／竹林舎、二〇一四年。

12　肥田路美『日本の古寺美術　浄瑠璃寺と南山城の寺』保育社、一九八七年。様式からも、中尊の溌剌とした迫力は法界寺（十二世紀初）らの繊細さとは一線を画すとして、嘉承三年（一一〇八）説に異論あり、これより早い時期ではないかとする。

13　淺湫毅「浄瑠璃寺の九体阿弥陀と四天王像をめぐって」『南都と南山城をめぐる僧と造仏』公益財団法人仏教美術研究上野記念財団、研究報告書四十一冊、二〇一五年。

14　伊東史朗「院政期仏像彫刻史序説」『院政期の仏像』京都国立博物館編、一九九二年、二〇四頁、仏師年表より。

15　この七年後にあたる永萬二年「僧祐恵田地寄進状案」に九体阿弥陀堂の存在が史料上初めて確認できる。『平安遺文　古文書編　第七巻』東京堂出版、一九七五年。

三三九〇文書「僧祐恵田地寄進状案　永万二年四月十二日条」

一奉納　私領田地事

合壹段者

在葛上群冊一條二里十八坪之内

右件田地者、当山住僧祐恵、自紀忠長之手傳得處也、而

爲滅罪生善、永以相副本公験、西小田原九體阿弥陀堂

奉納處也、更不可後代之牢籠、仍放新券之状、如件、

永萬二年四月十二日　　在判

当山住侶祐恵が紀忠長より譲り得た田地を、西小田原九体阿弥陀堂に寄進するという文書であり、「九体阿弥陀堂」の初出文書となる。

16　平林盛特・小林一行編『五十音引僧綱補任　僧歴綜覧』笠間書院、一九七六年。

17　杉山信三「阿弥陀堂の系譜」『日本古寺美術全集　第十五巻』集英社、一九八〇年。恵信の後ろ盾なくしては九体阿弥陀堂の建立は不可能として、嘉承二年（一一〇七）の堂を久安六年（一一五〇）に九体阿弥陀堂へ、さらに保元二年（一一五七）に移築したとする。

18　関根俊一「浄瑠璃寺九体阿弥陀如来像について」『近畿文化』五八三、一九九八年。保元二年（一一五七）説。恵信の影響によると示唆する。

19　「特別名勝・史跡浄瑠璃寺庭園　平成二四～二六年度調査」、有限会社京都平安文化財。平成二二年度から五ヵ年計画で景観の保存修理として行われた事業報告。平成二五年度報告書に、本堂が建つ池の西側盛土が十二世紀前半には施されたという調査結果。保元二年の本堂移建を裏付けるものとなる。

20　清水善三「平安末期における造仏之一例―「久寿二年、丈六阿弥陀仏像支度注文案」の場合―」『佛教藝術第九八号』毎日新聞社、一九七四年。「平安遺文」第十巻、久寿二年（一一五五）八月の年記「丈六像座餝支度注文案」（補遺八〇）、および「丈六金色阿弥陀仏像支度注文案」（補遺八一）の二通の文書は、丈六阿弥陀坐像一軀を造立するに必要な材料と技術者の賃金を請求する文書である。講師慶與は中堅仏所棟梁と見、一級の大仏師の造像よりは工人費用総額は下がるが、概ね当時の平均値が示される。

21　近藤瓶城編「後拾遺往生伝巻中」『史籍集覧十九』近藤出版部、一九〇二―一九二六年。

22　『真言宗血脈［一］［二］』国立国会図書館　デジタルコレクション。https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/2607416

23　甲田宥吽「親王院本『西院流血脈』」『高野山大学密教文化研究所紀要／密教文化研究所　編　十六号』、二〇〇三年、十一～七七頁。

24　尾崎左永子「『栄花物語』彩古抄　巻十八　玉のうてな」『歌壇十七巻十二号』本阿弥書店、二〇〇七年。

25　日向一雅「和州円成寺の縁起類の調査と翻刻」『明治大学人文科学研究所紀要　第四一冊』、一九九七年。

26　藤原公定　撰『新編纂図本朝尊卑分脈系譜雑類要集』吉川弘文館、一九〇四年。

27　『大和古寺大観　第四巻　新薬師寺・白毫寺・円成寺』岩波書店、一九七七年、七五頁。

28　『平安遺文　第五巻』東京堂出版、一九七五年。二三六五文書「大和國東大寺花厳会床饗免田注文案　保延三年三月条」華厳会免田については、『平安遺

文』三六七六文書「東大寺華厳会饗前支配状案」承安五年（一一七五）の古文書が残る。承安五年文書には櫟田六前小の領主は常任上の割注があり、阿波君公深から移譲されていることが知れる。

29　佐藤泰弘「華厳会免田の収取と領主」『甲南大学紀要一五四』、二〇〇八年、一〇頁。「東床饗料下行由緒記録」に基づき、華厳会饗料の収納は東大寺威儀師覚仁が収納を担ったとしている。

30　『平安遺文　第九巻』東京堂出版、一九七五年。四六三九・四六四〇文書「興福寺大和國雑役免坪付帳　延久三年（一〇七一）九月」櫟田庄の記録上の初見は、この「興福寺大和國雑役免坪付帳」である。

31　瀬野精一朗編『日本荘園史大辞典』吉川弘文館、二〇〇三年。

32　『平安遺文　第八巻』東京堂出版、一九七五年　四〇八一文書「興福寺政所下文　食堂造営料□去〃年段米未進事　寿永二年（一一八三）三月

一、實円領伊賀公
上土田庄平群郡十二町一段大
所當一石二斗一升六合六夕七才内
未進五斗二升加利并定（下略）

33　『角川日本地名大辞典　二九　奈良県』角川書店、一九九〇年。櫟田、飽波　阿波についての資料。

34　前掲注1　堀池春峰氏解説一〇九～一一一頁。「浄瑠璃寺流記」の当該箇所

一、文治四年申戌。申請　春日大明神并若宮等御神木神鏡。奉崇当寺鎮守矣。
（中略）推察クハ本願義明上人之時奉勧請之歟。日記等可尋之云々。
一、延久三年辛亥六月十四日。往生講始行之。土沙加持在之。
一、建久五年甲寅三月四日。両月之間木津三増池築立之。委細日記寺庫ニ在之。

文治四年（一一八八）と建久五年（一一九四）の間に、延久三年（一〇七一）の条が挟まれる。おそらく建久と延久の混同と思われる。堀池氏は、長算が藍本として用いた釈迦院本は、観応元年の書写の時点で必ずしも良本ではなかったようであるとして、その他の例として、承安四年（一一七四）と仁安三年（一一六八）の間に延応二年（一二四〇）の記事が四頁にわたって収められ、しかも承安四年と仁安三年が編年順ではないことを指摘している。

35　『恵信僧都全集　第一巻』比叡山図書刊行所、一九二七年、三三九-三五九頁

36　速水侑『日本仏教史　古代』吉川弘文館、一九八六年。

37　井上光貞『日本浄土教成立史の研究』山川出版社、一九五六年、「第四章　院政期の真言及び南都の浄土教」、三三五～三八〇頁。

38　塙保己一『続群書類従巻第二百　傳部十二』『高野山往生伝』、国立公文書館デジタルアーカイブス。日野法界寺如寂撰。元暦元年（一一八四）頃成立。

39　三善為康『日本往生伝三『拾遺往生伝』』永田文昌堂、一八八二年、国立国会図書館デジタルコレクション。天永二年（一一一一）頃成立。

40　五十嵐隆幸『永観『往生講式』の研究　影印・訓訳　養福寺蔵本『往生講私記』』思文閣出版、二〇一六年。

41　『大和路の仏教版画』町田市立国際版画美術館編、東京美術、一九九四年、十二～一五頁、一〇〇～一〇一頁。

42　『大和古寺大観　第七巻　海住山寺・岩船寺・浄瑠璃寺』岩波書店、一九七八年、八八頁。

43　内田啓一『美しき日本の仏教版画』東京美術、二〇一八年、一五〇～一五一頁。

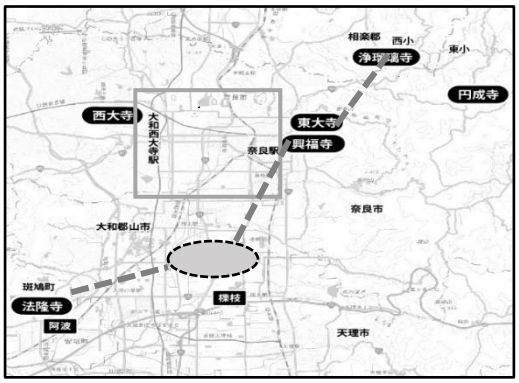
【挿図出典】

図1、2　『大和古寺大観　第七巻　海住山寺・岩船寺・浄瑠璃寺』岩波書店、一九七八年。

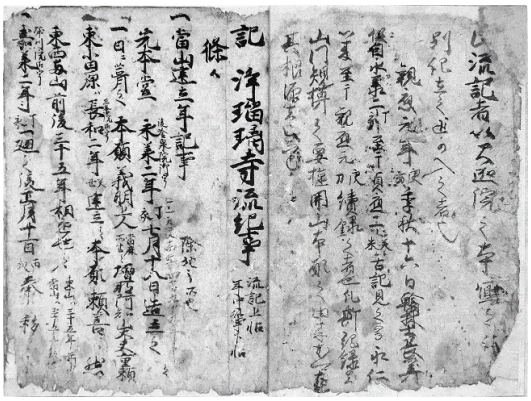
図3　筆者作成。

図4、5　町田市立国際版画美術館所蔵、デジタルデータ提供。

表1　筆者作成



（図３）浄瑠璃寺・櫟田庄・阿波・興福寺　位置関係図



（図１）『浄瑠璃寺流記事』巻首

（図５）阿弥陀如来坐像摺仏（百体一版）
町田市立国際版画美術館蔵

（図４）阿弥陀如来坐像印仏（十二体一版）
町田市立国際版画美術館蔵

（図２）浄瑠璃寺九体阿弥陀中尊像

西暦	元号	干支	記事	法会・供養	人物
一〇一三	長和二年	癸丑	東小田原随願寺創建　本願頼善		頼善
一〇四七	永承二年	丁亥	西小田原浄瑠璃寺創建　一日二葺く 本願義明上人　檀那阿知山太夫重頼		義明上人 阿知山太夫重頼
一〇七一	延久三年	辛亥	往生講始む。土沙加持在り	往生講 土沙加持	
一〇七七	嘉承二年	丁亥	正月本堂を壊始め、本仏（薬師如来）等を西堂に移渡奉る　七月上棟云々	本堂＝薬師如来等 西堂＝本尊？	
一〇八	嘉承三年	戊子	二月開眼供養　六月毘沙門供養（経源） 同二十日総供養（密供養） 阿闍梨東山迎接坊（経源） 願主阿波公公深	開眼供養 毘沙門供養 総供養	迎接坊経源 阿波公公深
一一三六	保延二年	丙辰	満山合力にて鐘を鋳る		
一一三九	保延五年	己未	夏中理趣三昧行始む。延観上人勧進	理趣三昧行	延観上人（岩本常光院）
一一四二	永治二年	壬戌	浄土院阿弥陀講始む　常教坊勧進	浄土院阿弥陀講	常教坊
一一四六	久安二年	丙寅	食堂、釜屋造　大般若経を本堂に安置 供養導師現観坊（東小田原）	大般若経安置	現観坊（東小田原）
一一五〇	久安六年	庚午	伊豆僧正恵信（忠通息）、延観上人の草庵岩本常光院に隠遁　興福寺一乗院末寺となる		恵信
一一五七	保元二年	丁丑	恵信、堀池に立石し、本堂を西岸の辺に壊渡す	本堂壊渡	恵信
一一五九	平治元年	己卯	十万堂棟上　勢覚上人勧進（興福寺住侶当山に隠遁）　一間四面堂建立　弥勒三尊像を安置	十万堂棟上 一間四面堂建立 弥勒三尊像安置	勢覚上人（興福寺住侶当山に隠遁）
一一六三	平治四年	甲丑	九条兼実願を打つ	扁額	九条兼実
一一六八	仁安三年	戊子	法雲院修理	法雲院修理	
一一七一	承安元年	辛卯	八祖御影供の行始む 八祖御影供聖教本尊は光明山より心覚坊取寄	八祖御影供	空心上人（勧進） 心覚坊（光明山寺二十五年―浄瑠璃寺―園城寺）
一一七一	承安元年	辛卯	一間四面堂を三間四面堂に改む　秘密荘厳院		阿闍梨空心一印上人 職衆十人東山中川等
一一七二	承安二年	壬辰	秘密荘厳院（真言堂）密供養	密供養	
一一七八	治承二年	戊戌	鐘楼造立	鐘楼造立	
一一七八	治承二年	戊戌	九月北京一条大宮の三重塔を壊渡す。翌年三月塔葺く	三重塔移建	供養導師空心一印上人
一一八八	文治四年	戊申	春日大明神并若宮等御神木神鏡。奉当寺鎮守矣。	神主泰真	
一一九四	建久五年	甲寅	木津三増池を築く		
一二四〇	延応二年	庚子	真言堂供養　大阿闍梨醍醐座主僧正実賢	真言堂供養	大阿闍梨醍醐座主僧正実賢

（表１）年表「浄瑠璃寺流記」長和二年～延応二年

Establishment of the Central Statue of Nine-Amidas in Joruri-ji Temple

TAKAHASHI Chika

The Nine-Amidas in Joruri-ji Temple in Minami-Yamashiro, Kyoto Prefecture, are the only remnants of the style in which many statues were created during the late Heian period, based on the Jodo beliefs.
The only clue to the temple's history can be found in the "Joruriji ruki" (Record of the History and Treasures of Joruri-ji Temple), however, since it was copied 300 years after the temple's founding, it is lacking important details. There are various theories about when the nine-Amida statues were created, which have not yet been determined.
This paper will carefully examine the descriptions, pujas, and characteristics of the "Joruriji ruki," using related historical sources to determine when the Nine-Amida statues were created.
The "Joruriji ruki" discussion in Kashou 2-3 (1107-1108) is the epochal period of the temple's history and is related to the Central statue of Nine-Amidas. Furthermore, the study examined the people involved in that year's puja, including "Goshoubou Kyogen," the preside over the puja, and "Awakou Koushin," the temple petitioner. Based on Kyogen's deep faith in the Jodo beliefs and his desire to receive the offerings, it was concluded that the Buddha image was the Central statue. Based on an ancient document that mentions Koushin's name, it was concluded that he was a monk of the Kofuku-ji Temple, lord of Shoen. In other words, the Central statue existed in Kashou 3, and the Kofuku-ji temple's involvement was suggested as the reason for its creation.
However, a discussion of the Ojou-ko in the "Joruriji ruki" of Enkyu 3 (1071) leads us to believe that the main image is a statue of Goushou. There was also an item delivered with the statue that was taken from the Amida at Joruri-ji, the "Amida Nyorai inbutsu" (12 pieces, one version) inscribed in Chouji 2 (1105). It is suspected that the "Amida Nyorai shuubutsu" (one hundred pieces, one version) dates back to the same year. This led to the belief that the Amida statue was established before Chouji 2 and Enkyu 3, at the latest. This Amida is a statue of Goushou and strengthens the possibility that the Central Statue of Nine-Amidas in Joururi-ji Temple was created as early as Enkyu 3 (1071) and as late as Kashou 2 (1107).